2023. 12. 31

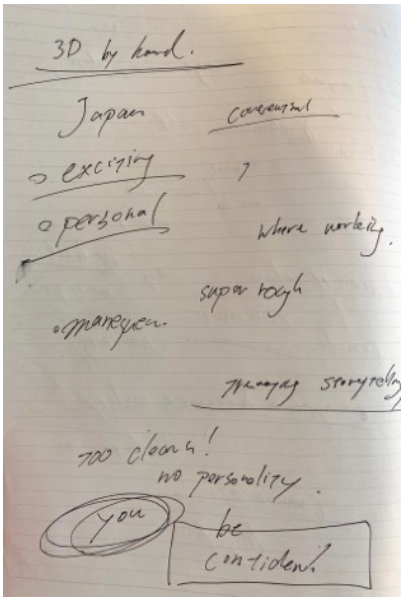
ual: central saint martins

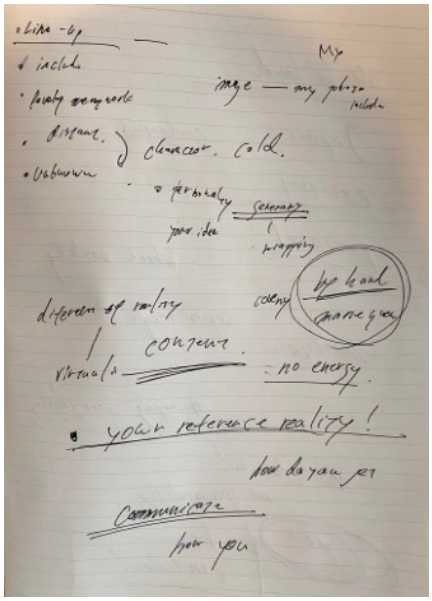
- 国際ファッション専門職大学: ファッションクリエイション学科
- 2023年卒業生: 浜名悠
- 留学先: イギリス
- 大学名: Central Saint Martins
- コース名: MA Fashion Womenswear (修士号/大学院)

第2回目校費留学レポート目次

- 講評
- コレクション制作

チューターからの講評

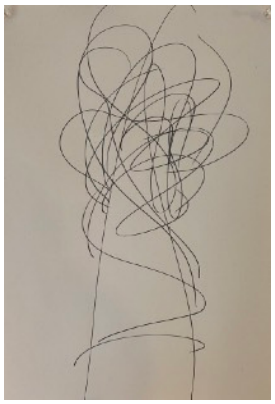




先月に引き続き今月は来月のコレクション作品の提出に向けて制作を行い、最後の講評をチューターの方々からいただきました。このプロジェクトは、1 Lookを全てハンドメイドでの制作、その他のLook、コンセプトやデザインプロセスをZine形式で発表するという条件です。講評では「あなたのアイデンティティが含まれていない」、「プロセスからあなた自身の感情が伝わってこない」、という作品から私自身が見えないというとても根本的で重要な指摘をしていただきました。合理的に考えたコンセプト、クリーンにレイアウトされたページ、リサーチに集中しすぎたなど私自身の主観的なものを排除したものやプロセスが多すぎたことが原因だと感じました。私が必死にペンの音をたてながらノートにメモをとっている様子を見て、そのノートを渡してくださいと言われました。ノートに書かれたスナップの効いた走り回る読みずらい文字、インク、ダイナミックなマークなどをチューターは見て、「これがあなたに足りません。」と言われました。とても悔しく、屈辱的な感覚でした。

2023. 12. 31

コレクションの制作

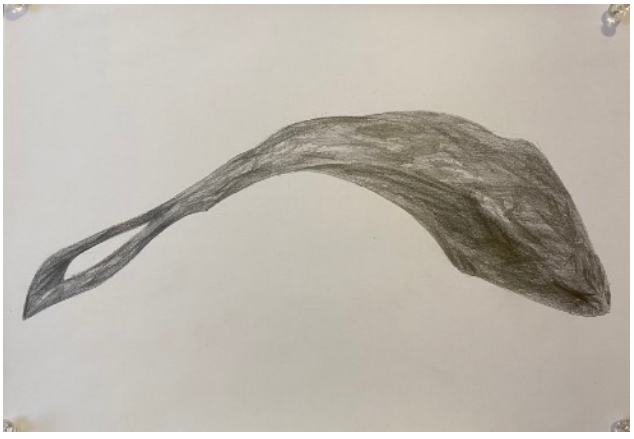


コレクションのカラーパレットやシルエットを作るプロセス、ソーイングテクニックなどの私が感覚的なものが多く含まれてついては評価していただき、私のクリエイティビティがまだまだ表に現れていないことと理解しました。ソーイング、パターンについては他の人たちと比べておそらく経験が少なく、大学時代から自信が無かったため、自己流でがむしゃらに行ったのですがそこを評価していただいたのは自分にとって自信になりました。チューターからは、最後に「もっとあなた自身を見せてください」、「自信を持ってください」と言っていただき、この大学院で私自身がどこか殻に閉じこもっていることに気がつきました。

そこでもう一度自身のコレクションを見直しました。今回のプロジェクトは、各々が指定された街の調査から得たインスピレーションを元にコレクション制作を行うものですが、私はもう一度Brixtonに出かけ、気に止まるもの、私にとって魅力的なもの、人、環境を記録しました。そして次の段階でそれらを元にドローイング始めました。私は幼少期から絵を描くことが大好きで、大学でファッションを学ぶ前までは絵画を学んでいたので、ペンや筆を使った表現は私にとって最も自然な行為でとても大切なものだからです。そこから見えてくるものがあると信じていました。

対象物を観察し、そこから感じた抽象的なものを紙にどんどんぶつけていきました。揺れ動く木目、走り回るグラフィティ、風に運ばれてくるゴミ袋、突き破られるゴミ箱、もこもこと顔を出す苔など、街にある様々な痕跡からシュールアルなものを感じ取りました。綺麗に街が整備されている日本と違ってロンドンのBrixtonでは、様々なところにゴミや荒れ果てたものがありますが、私はその方が自然なものだと感じました。これは、私が講評の時に提出したクリーンなZineにも繋がるものが見えてきました。以前のプロセスからは比較にならないほど、私自身の感情やエネルギーが含まれているように感じました。

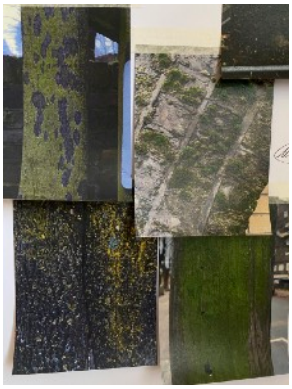
2023. 12. 31

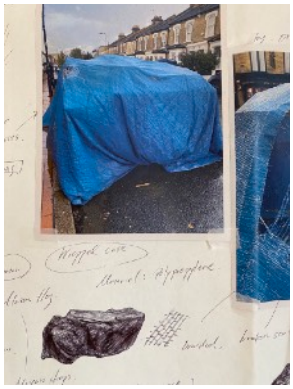
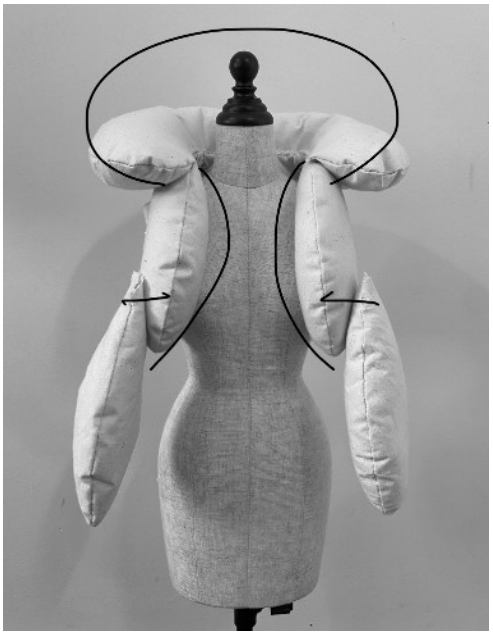


2023. 12. 31

そしてドローイングから見えてきた二次元なシルエット、テクスチャ、カラーを元にテキスタイル、3D開発を行いました。サステナブルなアプローチ、服の機能や作品、Zineのクリエイティブな仕上げなどまだまだ課題は残っています。1月の中旬にこのコレクションを提出しないといけないため、今月は制作に集中していました。これを乗り越えた先に良いデザイン、作品が生まれると信じて日々戦っています。来月は、ロンドンをもっと遊びまわりたいと思っております。

今年は様々な方々のお蔭様で大学院に入学し、新たな人生を歩むことができました。来年も物事に全力で取り組み、サポートしてくれる周りの方々や友人の期待に応えられるよう日々精進して参ります。今年もありがとうございました。





2023. 12. 31